

える梵字の集成を試みるのも一案であろう。

このほか、北条泰時・時頼邸跡（神奈川）出土の若宮大路造営関係の木簡も、忘ることのできない中世木簡であろう。

近世木簡は、例年数個所で出土している。本号収載のものでは、

平安京左京九条二坊十三町（京都）出土のローマ字木簡や、上永原遺跡（滋賀）出土の忠臣蔵上演関係の木簡などが注目される。前については、平安京左京内膳町跡（京都）出土の木簡（一九七八年、本誌第二号）につぐ事例である。後者は、木簡使用法の新しい事例といえよう。

また、本号では、吉田城三ノ丸跡（愛知）・大津城跡（滋賀）で、江戸後期の遺構から出土した木簡が報告されている。これまでには、江戸前中期の事例が比較的多かったが、いよいよ江戸後期も木簡研究の射程に入ってきたといえよう。

## 4

諸般の事情で本号に収載できなかつた木簡出土遺跡は、次のとくである。

矢谷遺跡（京都） 金剛寺遺跡（滋賀） 北土井遺跡（長野）  
俵田遺跡（山形）

これ以外にも、過去に木簡が出土して、本誌にその報告を掲載していらない遺跡が多くあると思われる。本誌では、溯った年次に出土した事例であつても、本欄や「一九七七年以前出土の木簡」欄で、

適宜とりあげていく方針で編集を進めてきている。木簡出土情報の収集と報告の掲載について、会員および関係各位の御協力をお願い申し上げる次第である。

（柴原永遠男）

## 凡例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および釈文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、釈文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「井」「井」「季」「駄」等についてのみ使用した。

一、釈文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、釈文に加えた符号は次の通りである（七頁第一図参照）。

「」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていること



木簡学会役員	
會長	岸 岸 俊男
副會長	大庭 倭
委員	青木 和夫
幹事	門脇 稔二
監事	佐藤 稔二
幹事	坪井 清足
監事	原 秀三郎
幹事	関 晃
幹事	綾村 宏
橋本	館野 和己
義則	
町田	土田 直鎮
章	直木孝次郎
寺崎	加藤 優
町田	田中 琢
寺崎	狩野 久
寺崎	岡崎 敬
保広	岩本 次郎
和田	鬼頭 明
和田	田中 稔
和田	東野 治之
萃	岡崎 敬
萃	鬼頭 明
萃	早川 庄八
萃	田中 稔
萃	東野 治之
萃	榮原永遠男

065型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によつて原形の判明しないもの。

091型式 削肩。

広島・草戸千軒町遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡—』を参照されたい。なおその他の中世木簡については以上の型式番号に適合しないものが多いので、注記を省略したものもある。

××位下財棕人安万呂  
×行夜使仍注狀故移

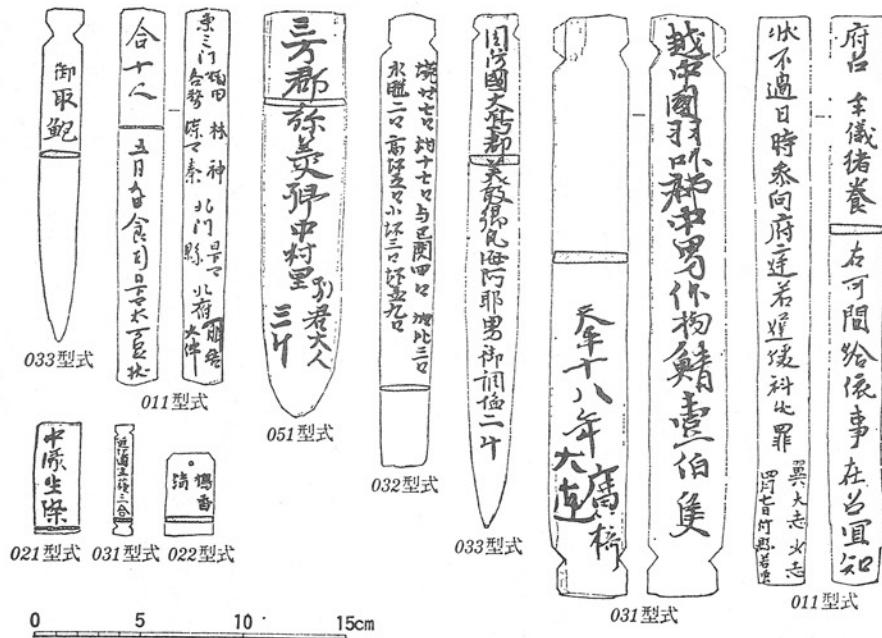
信下財係人安方昌  
行衣使仍此於叔行

泉進上材十二条中  
又衍八条

武威西里金衣郡餘戶里大新造斗年十二月

「武藏国男衾郡余戸里大贊鼓一斗天平十八年十一月」

第1図 木簡釈文の表記法



第2図 木筒の形態分類